

樂で、大勢の客が詰めかけ、会場がまだざわついていたとする。こうした時シテは客席が静かになるまでじつと待つ。観客は申樂の開始を待ちわびて、数万人の心がひとつとなり、今や遅しと楽屋に意識が集中する。この時を見計らつて登場しいっせい一声を謡いだすのだ。すぐに客席も時の調子に移つて、万人の心がシテの振る舞いに和合しわごう、しみじみとなる。こうなれば、何をしようともその日の申樂はもはや成功だ。

とはいうものの申樂というものは貴人のお出でを本もととするもの。もし早くお見えになつた場合は、すぐにも始めなければならぬ。しかし観客はまだ席も定まらず、遅れてかけつけ、立つたり座つたり、と万人の心はまだ能を見る準備ができていない。したがつてそうたやすくはしみじみとなることもない。こうした時の脇の能には、いずれの役で出たとしても、日ごろよりは色々と振りをも繕い、声も強々と使い、足の運びもやや大きめに、立ち振る舞う風情も観客の目をひきつけるように、いきいきとすべきだ。これで客席を静かにする。このような状況でも、なおのことその貴人の心

に叶う芸をすべきである。

さてこういつ時の初番の能が、十分に成功することは、返す返すありえないことだ。しかし貴人の御意に叶うことが本意なので、これは大事なことといえる。いずれにする客席が早々に静まり自然にしみじみとしてくれれば、悪いことなど何も無い。結局、客席の気負いや後れを読むということは、その道に長けた人でなければそうそう知れるものではない。

さらにいう。夜の申樂では様子が一変する。夜遅く始まれば、定めて湿るもの。さすれば昼であれば、二番目に演じる曲を、夜は初番に演じるべし。もしも初番で湿つてしまえば、その日は最後まで立ち直ることはない。いかにもいかにもよい能を利かすべきである。夜は少々客席がざわついていても、一声の謡い出しですぐさま静まるものだ。つまり昼の申樂は後半がよく、夜は最初がよい。もし最初に湿ってしまえば、立ち直る時期はなかなか巡つてこないものである。

秘儀ひぎにいう。そもそも一切のものは、陰、陽和するところの境に成就することを知るべきである。昼の気は、陽の気である。さればいかにも静めて能をせんとする企ては、陰の気となる。陽気の時分に、陰気を生じさせること、陰・陽和する心である。これが、能がよく出いで来くる成就の初めとなる。またこれは、観客が面白いと感じる心の元でもある。

夜はまた陰であれば、いかにもいきいきとはじめよりよい能をし、人の心を花めかせること、すなわち陽である。これが夜の陰に、陽気を和する成就となる。つまりは、陽の気に陽とし、陰の気に陰とすれば、和するところなく成就もあるまい。成就しないものが、面白いはずはなからう。また昼ではあっても時により何となく客席も湿つて、寂しげなことがある。これを陰の時と心得て、沈まないよう気を入れて演じるとよい。昼はこのように時により陰気になることがあるものだが、夜が陽になることはほとんどない。

観客席を前もって占うとは、こういふことをいうのだ。

問 能において、序破急じよはきやうをどのように定めるべきであろうか。

答 え これはたやすく定めることができよう。一切のことに序破急があるが申樂も同じである。能の風情に従って定めればよいのだ。まず初番の申樂には本説正ほんぜつしい曲をおく。しとやかではあるが、さほど技巧的ではなく、音曲おんきょく、働きもさつくりとした趣おもむきですらすらとよどみなく進めるべきだ。第一番目の条件は祝言しゆげんの曲であること。いかによい脇の申樂であっても、祝言が欠けては成り立たない。たとえ能はやや劣つていても祝言でありさえすれば問題はない。これが序であるという所以ゆえんである。二番・三番と進むにつれて得意な芸で、よい能をすべきだ。とりわけ終曲は急の位となる。こ

こぞと揉み寄せ、手数も尽くし演じきるべし。また、あくる日の脇の申楽には、前日とは趣向を変えた芸を出す。泣き申楽は、翌日以降、番組中ほどの頃よい時分を見計らって演じるとよからう。

問い 申楽の立合い勝負の手立てはどのようなものか。

答え これは肝要である。まず曲数を多くもつことだ。敵の能とは、かけ離れた趣の曲を敵とは違う芸風で演じるべし。序にいう「歌道を少し嗜め」とは、このためである。

この芸能において演者と作者が別であれば、いかなる上手といえども心のままに演じることは難しい。自作であれば言葉も振舞いも思いのままだ。されば能をしようと

いうほどの者なら、和歌の心得さえあれば申樂を書くことなどたやすいはずである。作能はこの芸能の命である。いかなる上手であつても、自作能を持たないシテは、いわば一騎当千の兵であつても兵具を持たない軍人と同じだ。技量の精練は立合いに顕れる。敵が花やかな能をするなら、こちらは閑かに趣を変え詰めどころのある能をするのだ。このように敵方と曲種をガラリと変えれば、たとえ敵の申樂が上出来であつたとしても、いたずらに負けることはない。もし能がよく出で来れば勝つことは必定といえよう。

申樂の現場においても、能には上・中・下の序列がある。本説正しく珍しく、幽玄で面白い曲をよい能というべきか。よい能をよく演じ、しかも出で来たものを第一とする。曲はそれほどでもないが本説に忠実で疵なくよく演じ、出で来たものを第二とする。曲はえせ能だが本説の悪い部分をうまく捌いて、骨を折り、よく見せたものが第三である。

問い　ここに大いなる不審がある。すでに相当年季の入ったシテでしかも名人とま
でいわれている役者が、かけだしの若いシテとの立合い勝負で負けてしまったと聞い
た。なぜであろうか。

答え　これこそ、先に述べた三十手前の時分の花の効果である。年老いたシテで、
すでに花も消え古風になってしまった頃合い、若いシテが珍しい花にて勝つことがあ
る。真実の目利きは見分けるもの。つまりは目利き対目利かずの批評勝負になってし
まうのだが。

とはいいいながら仔細しさいがある。五十を過ぎても、花が消えずに残っているほどのシテ
であれば、どんなに若く花盛りの役者でも、勝てるわけがない。さきほどの例は、た
だ普通の上手が、花が消えてしまったゆえ負けたということだ。いかなる名木である
うとも、花の咲いていない時期に、木だけを觀賞するだろうか。道端みちづたの名もない一重桜ひとえ桜

であろうと、今をさかりと匂におやかに咲きほこる初はつ花はなを見ないだろうか。こうしてたとえて見ると、一時いっときの花はなであろうと、立合たてあいに勝つのは当然のことだ。

すなわち最も肝要なことは、能の命は花にあり、ということ。すでに花の消えてしまったことも悟らず、元の名望にのみすがり続けること、返す返すも年取ったシテの誤りである。たとえ数々の物真似に通じようとも、芸に咲く花を知らなければ枯れ枝や草木のみを集め、眺めているようなものだ。万木千草ばんぼくせんそうにおいて花の色も皆々異なっても、これを面白いと感じる心は同じ花なのだ。物数は少なくとも、一方ひとかたの花を取り極めたシテであれば、その芸域での名望は、久しく続く。されば当人の心にくら多くの花が咲きこぼれていようと、人の目に映る工夫なくしては、田舎の桜やや藪やぶの中の梅が、誰にも見られることなくいたずらに咲き匂におっているというだけのことだ。

また、同じ上手といっても、その中には芸の段階がある。たとえばいふんと芸を極めた上手、名人であろうとも、この花の公案のないシテは、上手としては通じるであ

ろづが、後々までも花は残るまい。一方公案を極めた上手であれば、たとえ能が下るとも、花は残る。花さえ残れば面白さは一生続く。要はまことの花の残るシテには、いかなる若いシテといえども勝つことは叶わないものである。